

人を動かすもの ……～それは誠意だ！～

「人を動かすもの」をテーマとして「希望」「利益」「恐怖」「義理」を書いた。

今回は「誠意」について書こう

至誠にして動かされざる者は未だこれあらざるなり 「孟子」

紀元前 479 年、孔子が死んだ。孔子は中国史上における最初の思想家であり、また最高の思想家でもあった。

孔子の死後、中国は戦国時代に突入し、この世に混乱が訪れる。当時、中国は政治的にも思想的にも激動の時代であった。孔子は「仁」を理想とする儒教を創設したが、時代は「仁」より「力」、王者より「覇者」を要請した。

しかし、その死から百年後、孔子の理想復権のために立ち上がった男がいた。彼の名を孟子（もうし）という。冒頭の言葉は、彼の著作「孟子」の離婁章句上から抜粋したものである。

孟子は孔子の思想を一步進め、「仁」に代わる最高善として「誠」を掲げた。そして「誠意をつくせば必ず人を動かすことができる」と断言したのである。

しかし、なぜ孟子は「誠意によって、人を動かせる」と考えたのであろうか？そのロジックを説明していこう。「孟子」公孫丑章句上からの抜粋である。

例えば、よちよち歩きの幼児が井戸に落ちそうなのを見かければ、誰も思わずハッとして、駆けつけて助けようとする。この子を助けたら、親からお礼がもらえるかもしれないとか、人々から褒めてもらおうとかのためではない。また見殺しにしたら、非難されると恐れているためでもない。

人間は本質として、他人をあわれむ心を持っていると言っているのである。また彼はこうも言っている。「孟子」告子章句上からの抜粋である。

人間の本質は、確かに「善」である。なぜならば、人間は誰でも同情心、正義心、尊敬心、分別心を持っているからだ。人間は、もともとこれらの心を持っているのに、それに自覚していないだけなのである。

そう、彼によると、人間の本質は善なのだ。人間は誰も善意を持っている。故にこちらが心底誠意を尽くせば、相手の善意に必ず通じるはずなのである。孟子はこのロジックをもって、「誠意は必ず人を動かす」と考えた。

近年の日本では親が子を殺し、子が親を殺し、少年が少年を殺すといった異常な事件が多発している。そんな中で、孟子を読み、その考えに触れて、ホッとするのは、私だけではないはずだ。

孟子がいうように、人間には善意があるだろう。いや、あると信じたい。こんな世知辛い世の中だからこそ、誠意が人を動かす」と私は信じたい。

至誠にして動かされざる者は未だこれあらざるなり

この言葉を愛し、そして、実践した日本人がいる。幕末の思想家であり、明治維新の精神的指導者でもあった吉田松陰その人である。彼は誠のために生き、そして誠のために死んだ。

松陰は幕府によって処刑される前日に、政治的遺書を書き上げる。現在「留魂録(りゅうこんろく)」と呼ばれているものがそれであるが、その冒頭には以下のような記述があるのだ。(留魂録より抜粋意識)

昨今、朝廷と幕府の間には誠意が通じないところがあり、非常に残念である。私は自分のささやかな誠意を幕府に理解してもらいたかったのであるが、幕府に通ずることはなく今日にいたった。しかし、これも私の徳が薄いためだから今さら誰を咎め、誰を恨むことがあろうか。

松陰は誠意を尽くしたが、理解されず、処刑されることになった。しかし、それは自分の不徳の責任であり、誰のせいでもないと言っているのである。

奇しくも、明治維新の最大功労者である西郷隆盛が、松陰と同様のことを言っている。以下、明治3年に西郷が語ったという「南洲翁遺訓」からの抜粋。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、おのれを尽くして、人を咎めず、自分の誠意の足りないことを考えよ

吉田松陰と西郷隆盛が同じ境地に達していたとは、興味深いものがある。二人とも実直で、理想が高く、他人にやさしく、自分に厳しい男であった。

さて、今回は「誠意で人は動くか」をテーマに述べてきたが、こうおっしゃる人がいるかもしれない。結局、松陰の誠意は幕府に通じなかったではないかと

確かに松陰の誠意が、幕府を動かすことはなかった。しかし、彼の死後、彼の教え子たちが本格的に立ち上がるのである。

久坂玄瑞、高杉晋作、井上馨、山県有朋、伊藤博文、木戸孝允・・・etc.

彼らは松陰の遺書「留魂録」を回し読みし、奮い立ち、戦いの中に身を投じた。このことから、松陰の誠意が彼らを動かしたとはいえないか。

そして、松陰の教え子の約半数が、維新の戦いの中で、命を落としたという。そう、松陰の誠意は、彼らをして死の恐怖までも克服させたのだ。

誠意が人を動かし、さらには歴史までも動かした、良い事例である。

「本当のリーダーは死しても思想を残し、偽りのリーダーであるボスは利害損得で滅ぶ。」